

動詞「感じる」と格助詞

山西正子

キーワード 「感じる」 「が」 「を」 自動詞 他動詞

要旨：現代語の「感じる」——「感ずる」も含む——は、一般的には「人は舌で味を感じる」（『明鏡国語辞典』の例）のように使用される。動作主が何らかのコトガラを受容するとき、受容内容は格助詞「を」と共起する。しかし近年「入院中、あれほど持て余した長い午後が不思議なくらい短く感じた」（朝日新聞2001・9・22 34面）のような、受容内容が格助詞「が」と共起する例が散見される。この用法の拡大は顕著ではなく、偶発的な誤用として無視できないこともない。しかしこの「誤用」にはいくつかの問題が関わっていると考えられ、一度は検討の必要があろう。ここでは2点について考察し、この現象には現時点でそれなりの存在理由があることを述べる。ただし、将来、これが安定化するか否かを予測するものではない。

- ①現時点では、いくつかの場面で、受容内容と共に共起する格助詞に「が／を」の「ゆれ」がある（太郎はリンゴが／を好きだ、太郎は数学が／を分っていない、太郎はこの歌が／を気に入っている）。これが「感じる」にも生じた可能性がある。
- ②漢語動詞の自／他の区別はしばしば流動的である。一般的には「を」と共起する、「他動詞」と意識される「感じる」にもこれが及んでいる可能性がある。

- 内容
- 1 「感じる」に関わる一般的認識
 - 11 一般的と考えられる用法
 - 12 辞書その他の記述
 - 13 格助詞に関わる問題例
 - 2 「感じる」に関わる疑問例と関連事項
 - 21 疑問例一覧
 - 22 漢語動詞の自／他
 - 23 「映る」「響く」などとの類似点
 - 24 「感じる」と「が」
 - 3 参考となる事項
 - 31 「受身」の省略などの混乱
 - 32 「が／を」の混同もしくは「受身」の省略の類例

33 動詞「わかる」と共起する格助詞

4 まとめ

5 付言——動詞の自／他の区別および「格助詞」について——

1 「感じる」に関わる一般的認識

11 一般的と考えられる用法

稿者が一般的と考える用法を確認しておく。

稿者（1946年生まれ、生活・通学・勤務地は神奈川県・東京都・埼玉県のみ）の場合、「感じる」の用法として違和感がないのは、以下の(1)(2)(3)のような例である。いずれも朝日新聞から引用した。

(1) 親からの確かな愛情が感じられないことがつらい…略… (2003・11・26 21面)

(2) (高齢者には) 電車のつり革が高く感じられてなりません。 (2004・1・30 14面)

(3) 34歳になって初めて、珠恵は2人の子どもをかわいく感じた。 (2003・12・12 37面)

すなわち、(1)(2)のように受容内容と共に起る助詞が「が」であれば、「感じる」は「感じられる」のかたち——(1)は「可能」の解釈をすれば「を」でもよく、(2)は自発と解釈すべきであろうか——をとる。また(3)のように受容内容と共に起る助詞が「を」であれば、「感じる」は他動詞として、助動詞「られる」なしに単独で使用できる。

(1)(2)と(3)は、次の動詞の場合に準じて考えることができる。

(作例 4) 風の音を聞く。 : (作例 4') 風の音が聞こえる。

(作例 5) 将来を思い遣る。 : (作例 5') 将来が思い遣られる。

(作例 6) 往時をしのぶ。 : (作例 6') 往時がしのばれる。

また次のような表現に準じて考えることもできる。

(作例 7) 故郷を懐かしむ／がる。 : (作例 7') 故郷が懐かしい。

(作例 8) 子どもをいとおしむ／がる。 : (作例 8') 子どもがいとおしい。

(作例 9) 友人をうらやむ／ましがる。 : (作例 9') 友人がうらやましい。

いずれも、表現されるコトガラは同一である。これを受容する主体の側から表現するのが「受容内容+を+他動詞」の形式である。立場を替えて、受容内容の側から「受容内容+が」の形式で表現とすときは、他動詞がそのまま使用されることはなく、助動詞を必要とし（「聞こえる」は「聞かゆ」の変化したものである）、または「懐かしい」のような形容詞を使用する。

12 辞書その他の記述

現時点では、「感じる」は一般的に自／他両用が認められる。ただし辞書などの例文の多くは「を」と共に起るかたちが示される。この場合は「他動詞」と判定されるのであろう。また「に」と共に起る「彼の心意気に感じる」のかたちが、「感心する／感動する」意の「自動詞」となる。そして「要旨」に示した、「長い午後が不思議なくらい短く感じ

た」のような、受容行為の主体（原則として有情物）の側から、＜受容内容に、反応／感動する＞ことを意味する、「受容内容＋が＋感じる」の形式に言及するものはない。

120 調査対象とした、動詞の自／他の区別をする通行の 8種の辞書一覧

『明鏡国語辞典』	初版	2002	大修館書店	
『旺文社国語辞典』	第九版	2002		
『日本国語大辞典』	第二版	2001		
『岩波国語辞典』	第六版	2000		(主見出し語「かんずる」)
『集英社国語辞典』	第二版	2000		
『広辞苑』	第五版	1998	岩波書店	(主見出し語「かんずる」)
『新明解国語辞典』	第五版	1998	三省堂	
『日本語大辞典』	第二版	1995	講談社	

121 「他動詞」とのみ扱う辞書（以下書名のみ、版 刊行年 出版社名省略）

上記 8 種のうち、『明鏡国語辞典』は「他動詞」としてのみ記述する。「反応する」および「感動する」意の、「観測器が音に感じて」「別れに感じて涙を催す」も「他動詞」と判断されている。

122 自／他両用を認める辞書

他の 7 種は自／他両用を認める。『旺文社国語辞典』の記述で代表させる。

かん・じる [感じる] (自他上一) …活用型省略…①物に触れて感覚を生じる。

刺激を受けて反応を示す。「寒さを－」「印画紙は光に－」②気持ちをいさぐ。心に思う。「不思議に－」「好意を－」③感心する。感動する。「その熱意に－・じて許可した」…語源省略…

また『岩波国語辞典』は他動詞のほうが優勢と判断するからであろうが、「感じる」には「〔上一他自〕→かんずる」とし、「かんずる」の項でも『サ変他自』と、「他」を先に示している——自／他両用を持つ「生じる」「減じる」などは「自他」の順だが——。

123 参考となる記述

さらに「感動する」の意については、佐々木文彦2001が、「現代語では多くなく」としている。ちなみに、『三省堂小学国語辞典』第 6 版1981では

かんじる [感じる] ①感じをうける。気持ちがする。☐風が冷たく感じられる。②深く心にしみる。感動する。☐友だちの親切を、うれしく感じる。

としており、小学生は「コトガラ＋に＋感じる」のような表現を知らないであろうことが想像される。また小学生に示される形式が、「コトガラ＋が＋感じられる」と「コトガラ＋を＋感じる」であることも分かる。すくなくとも1981年以来20年以上、佐々木文彦2001と『三省堂小学国語辞典』

第6版1981の記述するところが一般的だったと認めたい。

13 格助詞に関わる問題例

現在も、格助詞「が／を」については、いくつかの場面で、「誤用」か否かが論じられている。詳しくは3で述べることとして、簡単にふれておく。

131 山崎 恵2000の指摘の概要。

動詞「好く」「嫌う」に基づく「好きだ」「嫌いだ」について

(10) 先生は私を好きですか。 (一般的対応は「私が好きだ」：「私を好く」)

(11) 君たちは政治を嫌いなのかい? (一般的対応は「政治が嫌いだ」：「政治を嫌う」)

のように、「好悪の感情の対象+格助詞「を」+「好きだ／嫌いだ」の形式が散見され、「誤用」とは言い切れない状況になっている。1978年の国際交流基金『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法I』はこれを「誤用例」としているが、実態は変容している。

132 又平恵美子2001の指摘の概要。

「イチゴが売っている」という表現は、格助詞「が／を」の使用の観点からは「誤用」であるが、規範からは逸脱しつつなお、一部では使用されている。

133 山西・駒走2004の指摘の概要。

動詞「わかる」について、「有情物に+コトガラが+わかる」用法が一般的である中で、「有情物が+コトガラを+わかる」用法が、一部の辞書の判断にも拘らず「誤用／俗用」ではなくなっている。全国紙などでも用例はしばしば確認できる。

このように、格助詞「が／を」に関わる問題は、いくつかの場面で生じているのであり、「感じる」と共起する格助詞についても考察の対象になり得る。

当面、一般的には「受容内容を+感じる」および「受容内容が+感じられる」であるが、「受容内容が+感じる」が散見される以上、これが将来も「誤用」のままかは不明である。現時点で、稿者にとっては、そして多分規範意識からも、「誤用」であっても、すでに一定の使用量をもつ用法がある場合は、これを看過すべきではないと考え、点検していく。

2 「感じる」に関わる疑問例と関連事項

21 疑問例一覧

日常、日本語を母語とする話者が、「あしたは空が高く感じそうですね」(2002・8・24 17:55pm フジテレビ気象番組)と言ったとしても、口頭語のレベルでは、偶発的ミスの可能性がある。格助詞「が」と「を」の混同や、「られ」——「受身」とも「可能」とも「自発」とも考えられる——の脱落が生じることもあるだろう。また単なる引用形式の問

題ともいえる。すなわち「空が高いと感じそうですね」と言うところを言い急いだのだともいえる。ところで、このような表現は、一般的ではないにせよ、すでに文字化されている。文字化の段階を経たものについては、書き手はそれを「正用」と認識していると、ひとまずみなし得る。まして全国紙の記事の「地の文」、記者の注釈、要約あるいはそれぞれの紙面での依頼原稿であれば「誤用」ではあり得ない。現時点では、調査の及んだ範囲のいかなる辞書にも言及されず、稿者にとっても違和感のある例を示す。(12)～(24)は朝日新聞(夕刊のみ「夕」、(25)は全国規模のマンション管理会社の情報誌の例である。

- (12) 「前より距離が短く感じる。いい感じがつかめた」。
(女子競泳選手寺川 綾の発話 2004・2・15 23面)
- (13) (大震災で死亡した息子が)天国でママを探して泣いているんじゃないか——。娘を連れて死のうと何度も考えた。娘だけが元気に育っていく姿が、つらく感じることも。
(2004・1・17夕 15面)
- (14) 「…略…スタンドが広いので球場がでっかく感じる」
(高校球児の発話 2003・8・8 30面)
- (15) ケイタは中学2年になって、排便後の手が不潔に感じ、何回も洗わないと気がすまなくなつた。
(精神科医 2003・6・14 20面)
- (16) 富貴恵さんは「24年間、北朝鮮にいたのが夢のように感じる」と半年を振り返った。
(2003・4・15 38面)
- (17) (丸山茂樹は)フェアウエーはかなり水を吸っている。そのためランが出ずに「相変らず(距離が)長く感じるね」と閉口気味だった。
(2003・4・10夕 17面)
- (18) 私だけでなく、ふつう、行きより帰りのほうが早く感じるという話はよくきく。
(五木寛之 2003・1・13 24面)
- (19) 長い休み明けはなんとなく体が重たく感じるが、本当に体重が増えた人もいるのでは？
(2003・1・7夕 1面)
- (20) (子育てはストレスも多いが)それが、3時間会わないだけで、ちょっとした笑顔が「あっ、かわいい」と感じる。
(桐島かれん 2002・10・27 30面)
- (21) 今回が4度目のシカゴとなった小幡佳代子(アコム)は「前半は曲がり角が多く、長い直線が続くよりも距離が短く感じる」と話す。
(2002・10・15夕 5面)
- (22) 車を運転する時間が長く感じ、後悔した。
(2002・6・26 33面)
- (23) 今、大きければ何とかなる、という発想がとても古くさく感じます。
(2001・7・21夕 7面)
- (24) (低温の三学期始業日)凍った路面に気を配り久しぶりの学校が少し遠く感じたのでは？
(2001・1・9夕 1面)
- (25) 自分が演じる側になってみると、台本の内容が浅く感じたり、何かもの足りないと思ってしまったんです。
(高木美保 月刊ウエンディ 153号 2002・2・15)

この14例は、いずれも、「コトガラ+が+感じる」である。一般的には「コトガラ+が+感じられる」もしくは「コトガラ+を+感じる」の形式をとるものと考えられる。稿者はこの14例に違和感をもつ。

違和感を払拭するには、「感じる」に、一般的な<受容内容を受け止める>という「他動詞」の解釈のほかに、<受容すべき内容が感性に訴えかける状態にある>とする、受容すべき内容の側の「自動詞」としての解釈をすればよい。あるいは、すでに一部にはそのような解釈が存在するからこそ、この形式が、偶発的とはいえないような頻度で見られるのではないか。そもそも漢語動詞はしばしば「自/他両用」であり、その可能性はあろう。

22 漢語動詞の自/他

さらにいえば、漢語動詞の「自/他」の判断は辞書によって一致しない場合や、辞書が現実の用法を反映しきれない場合も少なからずある。「自/他」の判断は流動的で、「感じる」についても判断が変わる可能性はある。

たとえば、「輩出する」「両立する」についての辞書の判断は以下のとおりである。

	「輩出する」	「両立する」
『明鏡国語辞典』	自/他	自
『旺文社国語辞典』	自	自
『日本国語大辞典』	漢字2字の漢語動詞は見出し語とせず	
『岩波国語辞典』	自	自
『集英社国語辞典』	自	自
『広辞苑』第五版	漢字2字の漢語動詞は見出し語とせず	
『新明解国語辞典』	漢字2字の漢語動詞は見出し語とせず	
『日本語大辞典』	自	自

『明鏡国語辞典』が「輩出する」を自/他両用とするが、ほかはすべて「自動詞」である。また、漢字2字の漢語動詞は見出し語としない場合も、説明や例文は、いずれも「自動詞」扱いである。

まず「輩出」について一例を挙げる。

- (26) はいーしゅつ【輩出】〔名〕①すぐれた人物が続いて世に出ること。立派な人材がつぎつぎと出ること。…略… (『広辞苑』)

この項目からは「輩出する」は「自動詞」としてしか読みとれないが、同じ『広辞苑』の「ひろせたんそう」(広瀬淡窓・漢学者)の項の説明には他動詞用法がある。

- (27) …略…門生三千の中から多方面に人材を輩出。…略…

また「両立」も

- (28) りょうーりつ【両立】リャウ 〔名・自サ変〕二つの物事が支障なく成り立つこと。「学業とクラブ活動をーさせる」 (『明鏡国語辞典』)

とある。しかし次のような「他動詞」の例はしばしばある。

(29) 「野球と勉強を両立している学校はたくさんある。負けられない」と表情を引き締めていた。

(高校野球地方予選の記事 1997・7・15 28面)

このように、辞書の、漢語動詞に関する自／他の判断は、現実と一致しないこともある。「コトガラ+が+感じる」の自動詞「感じる」についても、その背景を説明できれば、たとえば「生じる」「減じる」などと同様、「自／他両用の漢語動詞」として許容される可能性もあると考える。

さらには、辞書でも自／他両用とされる「解散する」には、次の例もある。一つの記事の中で同じコトガラを伝えるために、両用法が使用されている。漢語動詞の「自／他の垣根」の低さの一例といえる。

(30) 学生の課外活動のための学内団体を大学が解散できるかが争われた訴訟で…略…この訴訟は、岡山大学が95年、学内のサークルを統括する「学友会」を解散させたことに伴い…略…

(2004・4・20夕 15面)

23 「映る」「響く」などとの類似点

あるコトガラが、有情物に、何らかの印象を与える存在となっているとき、そのコトガラを主体として格助詞「が」と共起させ、自動詞「映る」「響く」などを単独で使うことがある——(31)(32)参照——。一般的には複合形式で6拍の「感じられる」であるものが、時に「感じる」のまま使用されるのは、「映る」「響く」のような単独語の存在が影響するのではないか。

(31) 彼の態度が人にどのように映るか

(『集英社国語辞典』の例)

(32) 解説者の声为空疎に響く

(『明鏡国語辞典』の例)

「映る」「響く」をそれよりはるかに頻度の高い「見える」「聞こえる」と比較してみる。「見える」「聞こえる」はそれぞれ「見る」「聞く」と同一ではない、複合性を感じさせる語であるのに対し、「映る」「響く」は何の複合要素も伴わない、単独語として認識できる。この形式を「感じる」に応用すれば、(12)は(12')から直ちに作り出せる。

(12) 「前より距離が短く感じた。いい感じがつかめた」。

(12') 「前より距離が短く感じられた。いい感じがつかめた」。

視覚に訴える「態度が映る」、聴覚に訴える「声が響く」のような、「コトガラ+が+単独語」形式があるのなら、感性に訴える「距離を感じる」があっても、徹底的に排除するには及ばないともいえる。さいわいなことに、「感じる」はしばしば自／他両用をもつ漢語動詞であり、自／他に関する「違和感」のようなものはやがて払拭される可能性もある。さらに言えば、「受身」とも「可能」とも「自発」とも考えられる曖昧な「られ」は使用したくないとの「積極的」な判断もあろう。また「感じられる」をいわゆる「ら抜き」として「可能」であることを明示する「感じれる」にすれば、これはまたしばしば非難の対象になる。となれば、「距離が短く感じる」で通用するなら、冗長かつ曖昧な「感じられる」より、(「感じれる」などは避けて)「感じる」を選択することもあろう。

24 「感じる」と「が」

「感じる」の場合、動作主体と受容の対象がともに有情物となるケースもある。この時、「が」は動作主体と共起することもあるだろう。しかし、しばしば生じるのは、「有情物が+コトガラを+感じる」場面である。この時、「有情物」が「話し手」であれば「私が」は省略されやすいし、「有情物には+コトガラが+感じられる」という形式で表現されることもある。格助詞「が」は、「感じる」動作主体とのみ結合するのではなく、受容するコトガラと共起する例も多い。

(作例33) 太郎が花子を誠実に感じた。

(作例33)は動作主体が「が」と共起する。しかし有情物の受容するコトガラが「が」と共起する例もしばしばある。文筆業の人々の、推敲を経たであろう文章でも(無論、それ以外でも)、動作主体は省略されたり((34)(35))、「に」と共起したりする((36)(37))。ただし、「感じる」は「感じられる」のかたちになるのが原則である。

なお、この「に」は「可能」の主体——例えば「太郎には登れない」など——とも考えられ、その場合「感じられる」の「られ」は「可能」の解釈を生ずることになる。

(34) 「自分一人生きて帰って来て申訳ありません。この家の敷居が何十丈にも感じられます」

(「感じる」主体は話し手の渡辺中佐 阿川弘之『山本五十六』

引用は「新潮文庫の100冊CD-ROM版」による。以下(37)まで同じ)

(35) そんなふうなものが、はるかな遠い国のことのように感じられた。

(「感じる」主体は筆者 五木寛之『風に吹かれて』)

(36) 僕には黒人兵が従順でおとなしく、優しい動物のように感じられるのだ。

(大江健三郎『飼育』)

(37) 加恵には、肌を針で刺すように痛く於繼の憎しみが感じられた。

(有吉佐和子『華岡清洲の妻』)

このように、一般的には「コトガラが+感じられる」(および「動作主体が+コトガラを+感じる」)である。しかも、動作主体が「話し手」であるために省略されたり、「に」と共起したりすれば、「が」を動作主体マークとして確保する必要はますます減少する。「コトガラ+が」の結合が比較的「安泰」でいられるのである。

格助詞「が」の重複は許容されはするが、推奨されるものでもない。一回だけ使用するなら、「コトガラ+が」のかたちで使ってもよい。一般的には非有情物であるコトガラが<何かを感じる>とは考えにくく、<そのコトガラが有情物に訴えかける状態にある>のだろうとの判断がなされ、誤解は生じにくい。しかも「可能」や「願望」「好悪の感情」の対象がしばしば「が」と共起するし、自動詞「聞こえる」「見える」の受容内容も「が」と共起する。「が」を受容されるべきコトガラの側に結びつけるのに違和感はない。

そのような環境下で、「感じる」が、漢語動詞の特性を發揮し、自/他の「垣根を乗り越えて」侵入して来れば、「受容内容+が+感じる」が成立することになる。

自動詞の「感じる」は、従来の規範としては、「感動する」の意しかもたず、それ以外は「誤用」である。しかし、現時点で、〈あるコトガラが動作主体となり（＝「が」を伴い）〉、〈有情物の感性に訴えかける状態にある、の意をもつ〉方向にも進み始めている可能性がある。とすれば「空が高く感じる」は、「空が高く感じられる」と同一のものとして許容される。いつか、この形式が(12)以下のように文字化されても違和感がなくなる、あるいはすでになってきたのもあろうか。「感じる」は、以前から、他のいくつかの漢語動詞同様、自／他両用であった。そして現時点で、自動詞として用法に変化が生じ始めているものと考えたい。いま、状況に基づいて以下の2点を提言しておく。

提言1 (12)～(25)を単なる「誤用」として排除しきれるか、検討する必要がある。

提言2 「感じる」が、新たに、〈コトガラ（時には有情物でもある）が、他の感性に訴えかけてくる状態にある、あるいは感じさせている〉の意をもち始めている、との解釈は不可能か。

3 参考となる事項

31 「受身」の省略などの混乱

「空が高く感じられる」を仮に「受身」と解釈する場合、漢語を使用する表現では、「受身」マークの省略などの「混乱」が生じやすいことを意識しておきたい。

日常使用される漢語動詞の「する」は、新聞の紙面やテレビの字幕では省略されることがある。ことに見出しに顕著であるが、本文中でも、漢語の「名詞止め」というべきものもある。

(38) 米、名護移転見直し打診 (「米国が打診する」の意、見出し 2004・3・25 1面)

(39) 朝鮮民謡、後世に継承 (「朝鮮民謡を継承する」の意、見出し 2004・3・25 31面)

これらは「する」の省略として容易に理解できるが、「受身」の「される」や「使役」の「させる」が省略されたり、逆に不要な「される」「させる」が添加されたりもする。

(40) 胃にやさしい腸溶錠タイプが日本でもようやく発売。

(「発売される」の意、受身マークが必要、書籍の広告 2002・1・27 1面)

(41) この日、同期入団の新垣が1軍選手登録を抹消。

(「抹消される」の意、受身マークが必要、スポーツ情報 2003・5・28 15面)

(42) やがて麻美の車から熊沢の血痕が検出、捜査陣は彼女を逮捕する。

(「検出される」の意、受身マークが必要、テレビ番組の案内 2003・8・6 31面)

(43) (不調の女子テニス雫子牟田選手について) 得意の強打をさく裂できない。

(「さく裂させる」の意、使役マークが必要 1997・6・30 30面)

(44) それでもあきらめず戦う選手たちに何度鼓舞させられたことだろう。

(「鼓舞された」でよい、使役マークは不要、読者の投書欄 2003・11・30 16面)

(45) 昭和19年秋…略…父は応召されました。

(父に対する敬語とは考えられないので「応召しました」でよい、

受身マークは不要 読者の投書欄 2004・1・12 16面)

これらの例から、漢語動詞の自／他の解釈は流動的であるとせざるを得ない。他動詞と考えられる「発売する」「抹消する」「検出する」だが、受身マークなしで「発売／抹消／検出される状態にある」の自動詞として通用するかのごとくである。

また「さく裂する」は「他動詞」と解釈されたからか、使役マークが省略された。「鼓舞する」は「自動詞」と解釈されたからか、使役マークが加えられた。また自動詞「応召する」は他動詞「召集する」と混同されたのか、受身マークが加えられている。

ことに(40)(41)(42)の場合は、規範意識からいえば、腸溶錠タイプが何を発売するのか、新垣がだれの1軍選手登録を抹消するのか、血痕が何を検出するのか、が問題になるところであるが、われわれは(時には違和感をもちつつも)、「受身」マークの省略と納得させられることになる。

「発売」イコール「発売される状態になる」でもあるなら、「感じる」イコール「感じられる状態になる」にもなり得るのではないだろうか。

和語動詞の場合、ある「動き」の発生を、実際に動く側に視点をおくか、働きかける側に視点をおくかは、接尾辞で区別する(例えば「戻る／す」「流れる／す」「高まる／める」「届く／ける」など)。この接尾辞は、視点のおきかたに規制され、一部の例外を除き、共用・混用されない。組み合わせも多様で敏感にならざるを得ない。

漢語動詞の場合は、接尾辞が和語動詞の場合のように多様でなく、二字漢語では、それ自体が自／他両用の「する」のほかに、受身の「される」、使役の「させる」、可能の「できる」があるが、「できる」以外は、時には便利な「する」に依存することになるのであろう。「感じる」のような一字漢語の場合も類似の状況が考えられるのである。

32 「が／を」の混同もしくは「受身」の省略の類例

「が／を」の混同の例として 132で又平恵美子2001の「イチゴが売っている」を示したが、これも、規範からいえば「誤用」であるにせよ、その存在を「特別の領域での現象」として押し込めておけるのかは疑問である。

又平恵美子2001は「イチゴが売っている」形式について、用例調査にインターネットのロボット系検索エンジンを使用し、

用例が存在したホームページは個人の日記や、掲示板で書かれたごく個人的なものがほとんどで、たとえば企業や公的機関のページにはヒットしなかった。つまり文章が公開されるまでに、何度か校正を経ているような文体には表れにくいということから、「【商品】が売っている」という表現は、規範的な文法からは逸脱するものであると通常は考えられているようである。としている。ここでは、全国紙での用例を積極的に調査してはいない。

しかし、この「イチゴが売っている」形式は朝日新聞でも1997年の時点から確認できる((46)~(49))。またスーパーマーケットの広告の連載漫画「アララさん」(作者みつはしちかこは1941年生まれ)にも「おばあちゃん」の発話として書かれている((50))。

(46)(49)は会話(とその引用)文であるが、(47)は直木賞作家の創作の「地の文」、(48)は広告文である。いずれも校正を経ているであろう。規範意識をすりぬけ、許容されるものとして表面に出てきたのではないか。「イチゴが売っている」形式は静かに力をためつつあるものと考えてよいだろう、ただし、現時点で辞書は言及していない。

(46) 「教会の前には屋台がたくさんあって、お米で作ったケーキなどお菓子が売っているんです」
(フィリピン出身歌手マリーンの発話、翻訳であろう。1997・11・26夕15面)

(47) 僕達が遭遇したのは、秋葉原の電気街の、しかも量販店ではなくて、路地裏にある電気部品や盗聴器なんかさがりげなく売っている古びたビルの中だった。

(山本文緒『アクセス』2000・7・29夕5面)

(48) あゆ(23)あの運命の日のドッグプレートが売っている！

(『女性自身』の広告 2001・11・13 8面)

(49) メンズショップにはカワイイのがいっぱい売ってるからよく見に行くんだって。

(「ウチらのはやりモン」2003・7・27 32面)

(50) 「北海道市やっててスジコが安く売ってたからウチでほぐしてイクラの塩づけにしたのよー
今夜はイクラドンよー」 (2002・11・6)

「イチゴが売っている」形式を、格助詞「が／を」の混同例と解釈するか、受身マーク「られる」の省略と解釈するか、(あるいはその他の解釈の存在を考慮すべきかも含めて)判断は難しいが、「空が高く感じる」形式に類似の「誤用」の形式といえる。

33 動詞「わかる」と共起する格助詞

山西・駒走2004は、「わかる」に関わる形式について、伝統的には「有情物に+コトガラが+わかる」であったが、近年、「有情物が+コトガラを+わかる」も広くおこなわれていることを示す。またこの「～をわかる」形式となる、「わかる」の「他動詞」用法を、ある辞書は「俗に」、ある辞書は「俗用」と評価するが、2003年の時点で、韓国にはいかなる説明もなしに「他動詞」と記述する辞書が出現していることも報告している。国内の辞書が原則的に「わかる」を「自動詞」とする中で、実態と解釈は変化しつつあることが知られる。

他動詞「わかる」が否定的ながら記述されるのは、無視しきれない段階に達しているからである。事実、専門的な辞典では「場合によっては可能」との判断も示される。

それに対し、「空が高く感じる」形式、すなわち自動詞として、〈他の感性に訴えかける状態にある(または〈他に何かを感じとられて当然の状態にある)〉の意の「感じる」は、辞書で言及されることはない。上記(12)～(25)の文字化の例まであるものの、現時点では、規範的にみれば疑う余地のない「誤用」だからである。

将来において、「感じる」に関わる形式が、伝統的な「有情物に+コトガラが+感じられる」(「感じる」は他動詞)のほか、「コトガラが+感じる」(「感じる」は自動詞)をも許容するなら

ば、それは、「わかる」に生じた変化と類似しているといえる。「わかる」は自動詞主体から他動詞用法をも許容し、「感じる」は他動詞主体のところへ自動詞用法が進出して来る点が異なるのみである。

そしてまた、「空が高く感じる」形式は、32の「イチゴが売っている」形式とも相違している。「イチゴが売っている」形式の場合、つねに「売っている／いた」のかたちをとるのに対し、自動詞「感じる」には、その制約がない。「見える／聞こえる」などに準じ、「しかるべき状態にある」と理解されるので、「テイル」形式とはならないのである。

4 ま と め

以上の記述により、以下のaを確認した上で、「要旨」の①②に対応するbcの2点を指摘できたと考える。

- a 「空が高く感じる」形式は口頭語のみならず、文字化された例も、一定数ある。
- b 現時点の日本語には、格助詞の「が／を」の使用について、いずれも許容されるケースがあり、「空が／を高く感じる」もそれに準じて許容される余地なしとしない。
- c かりに、自動詞「感じる」が許容されるとすれば、「感じる」が漢語動詞であることが関わっているだろう。漢語動詞の場合、文末で自／他両様の解釈が可能な「する」の省略のほか、受身や使役のマークの混乱がみられる。自／他の判断が流動的であるために、必要なマークを欠いたり不要なマークを加えたりという現象が見てとれる。

ジーン・エイチスン1999はいう。

スロー・クイック・クイック・スロー式シナリオ——初めはチョロチョロ、次は爆発的成長、最後はスピードが落ちて安定——は、グラフにすると「S字型カーヴ」、つまり右肩あがりのS字型の線になる。このような動きは、地球上のいろいろな出来事、たとえば潮の満ち引きの根底にあるものだ。潮が引くとき、最初は数ガロンの海水が引くだけだ。ついで大量の海水が海の方へ戻ってゆき、そのあとは残りの数ガロンがゆっくりと引いてゆく。

このような、スロー・クイック・クイック・スロー式シナリオについて、日本語に関しては、すでに井上史雄1998が、「ラ抜きことばの拡大過程」に適用しているが、日本語の変化の解釈にしばしば有効であろう。

これによれば、本稿の指摘する「空が高く感じる」形式や「イチゴが売っている」形式は、＜最初の数ガロンの海水が引く＞段階にあり、引き続き＜大量の海水が海の方へ戻ってゆく＞状態になるかは予測不能である。しかし、33で示した「有情物がコトガラをわかる」の他動詞「わかる」は、すでに＜大量の海水が海の方へ戻ってゆく＞状態に至り、もはや他動詞「わかる」を否定することはできなくなりつつあるといえる。

「空が高く感じる」形式や「イチゴが売っている」形式のように、規範としては「誤用」であっても、多少なりとも許容される余地のあるものは、いつか、「誤用」との判断をすり抜けて、ひとつの潮流に成長する可能性もあるだろう。

今後も観察テーマとしていきたい。

本稿は、「そもそも、日本語に自／他の区別は必要か、また格助詞とは何か」などの根源的問題について言及できていない。しかしながら、実際問題として、多くの日本語話者あるいは学習者が、ことに文章を書く際に、自／他の区別や格助詞の選択に迷った場合、かれらはしばしば辞書を判断の基準とする。そして自／他の区別——それは格助詞の選択に関わってくる——を示す辞書は少なくない。

この現実を前にして、辞書の記述を点検し、あるいは現時点での規範意識を確認することで、ここでは、「空が高く感じる」形式が「誤用」であるか否かの質問に、規範意識としては「誤用」である、ただしその「誤用」にはそれなりの理由がある、の2点を提示できたと考えている。

5 付言——動詞の自／他の区別および「格助詞」について——

稿者は、日本語は、動詞の自／他の区別に良くも悪くも「敏感」であると考えている。たとえば、近年では「立ち上がる」に対応する「立ち上げる」が安定化している。『広辞苑』第四版1991では載録されなかったものが、第五版1998に載録された。また過去にも、「繋ぐ」と「繋がる」がある一方で、「がる」との対応から「げる」を含む「繋げる」も一般化した。『明解国語辞典』第四版1993では載録されなかった「繋げる」が第五版1998に載録された。このように、しばしば形式的に対応する語が確保されてきているのである。そして多くの場合、働きかける対象、あるいは受容する内容については、格助詞「を」で明示することになる。この事実だけは動かせないであろう。

また格助詞「が」そのものの性格についても単純に処理できるとは考えていない。

近年、周知のように「～が～いただく」形式が一般化している。すなわち

(51) 「地元のみなさんが安心して全国を駆け巡って来い、と言っただくと本当にありがたい」
(衆院選公示日の政党党首の演説 2003・10・28夕23面)

のかたちである。これを、単に「いただく」と「くださる」の誤用とみることも可能ではあるが、しかし、「が」の「動作主」を明示する機能に依存した、「に」から「が」への「乗り換え」ともいえるであろう。「が」の「動作主をを明示する格助詞」としての側面が強く意識された結果と考えたい（「に」の負担軽減が先行しているとも考えられるが）。

一方で、可能の内容や、好悪の感情の対象も「が」で示すことから混乱が生じる。「小学生が飼えるペット」「こどもが好きな卵焼き」は実際問題としてひとつの解釈しかない。しかし、稿者の場合、「太郎が信頼できない花子」「太郎がうらやましい／ねたましい花子」では、どちらかといえば「太郎を信頼しない／うらやましがる／ねたむ花子」と同義だが、反対の解釈も否定できない。そして「太郎が好きな花子」では、文脈に合わせてどちらにも解釈する。まさに、「格関係を明示できない」側面を象徴する例である。

さらには、又平恵美子2001が指摘する「～がやっている」の例（(52)）のほか、格関係を越えた、「話題主」を示す「が」が文字化されてきている。

(52) 「録画するには、その番組がどのチャンネルで、何月何日の何時から何時までやってるのかをテレビに教えてあげないと、予約できないよね」 (2004・4・3タ6面)

(53) 我が家では…略…10%が運営費、90%が難民の支援に使っているというNGOと、近所の障害者作業施設に直接寄付しています。 (読者の投書欄 2001・10・10 14面)

(54) 四苦八苦しの末、定期券の駅名が間違えていて、訂正を日本語で用紙に書き込まなければならぬことが分った。 (読者の投書欄 2004・4・10 14面)

あたかも「駅名は間違えた」と「(だれかが使用人名や有効期間は間違えなかったが) 駅名を間違えた」の指し示す事態が同一であるように、「が」が格関係を超えて、「話題主」を提示する用法を拡大しているかのごとくである。

「が」の多様性についても、考察を続けたい。

【参考文献】

- | | | |
|----------------|------------------------------------|----------------------|
| 井上史雄 1998 | 『日本語ウォッチング』 | 岩波新書 |
| 佐々木文彦 2001 | 「かんずる」『日本語文法大辞典』 | 明治書院 |
| ジーン・エイチスン 1999 | 『ことば 始まりと進化の謎を解く』(今井邦彦訳) | 新曜社 |
| 又平恵美子 2001 | 「イチゴが売っている」という表現『筑波日本語研究』第六号 | 筑波大学文芸・言語研究科 日本語学研究室 |
| 山崎 恵 2000 | 「「～を好きだ／嫌いだ」という表現について」『日本と中国ことばの梯』 | 佐治圭三教授古希記念論文集 |
| 山西正子・駒走昭二 2004 | 「動詞「わかる」と格助詞——実態と規範意識——」 | くろしお出版 |
| | | 『目白大学人文学部紀要』第11号 |